

Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.4 April 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

4

CONTENTS

- ・ 巻頭言
天理教学はディシプリンか？
／井上 昭洋 1
- ・ 文脈で読む「身上さとし」(6)
明治 20 年 9 月の「おさしづ」
／深谷 耕治 2
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”
で— (最終回)
おわりに
／成田 道広 3
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (32)
21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ②
／藤原 理人 4
- ・ 音のちから—中国古代の人と音楽 (13)
出土楽器が語る音の世界—編鐘をめぐる—
／中 純子 5
- ・ ヴァチカン便り (61)
コンゴ、南スーダンへ司牧の旅へ
／山口 英雄 6
- ・ 思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考 (24)
仏教にみる障害者像
／八木 三郎 7
- ・ おやさと研究所ニュース 8
第 355 回研究報告会 (1 月 27 日) / 信条教育に関する研究会を実施 (2 月 16 日) / 2022 年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」

巻頭言

天理教学はディシプリンか？

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

「いわゆる文系の人類学」は、国によってその名称が文化人類学、社会人類学、民族学と異なる。加えて、理系の自然人類学(形質人類学)もあり、日本では単に「人類学」と呼ぶ時、こちらの人類学を指すことが多い。日本の学会もかつては日本民族学会であったが、名称変更されて現在は日本文化人類学会となっている。学会名称変更問題が起こった時、当時下っ端の教官だった私は講座の主任教授に命ぜられて、名称変更賛成する投書を学会宛に出した。しかし、(理系の)日本人類学会があるので、日本文化人類学会という名称では下部組織に誤認される可能性がある。自分の意見として書いたのかどうか、今となっては判然としないが、米国に倣って日本人類学会も日本自然人類学会に改名して、文化人類学と自然人類学を人類学の名の下に統合した方がよいといったことを述べ、「どこの若造がこんな暴言を吐いているのだ！」と形質人類学の重鎮を怒らせたことがあった。

国によって名称の異なる、社会科学の末っ子と言っていい文化人類学だが、その理論的変遷は、19 世紀後半の古典的進化主義に始まり、20 世紀前半の機能主義、20 世紀中盤以降の構造主義といった大きなパラダイムを経て、現在に至っている。また、支配的なパラダイムとなることはなくとも、伝播主義、新進化主義、解釈人類学とそれに続くポストモダン人類学と、時に応じて様々な理論や学説が提唱されてきた。これは私の偏見かもしれないが、文化人類学を専門とする者からすると、理論や学派が形成されて一つのパラダイムが生まれ、それを乗り越える新たな理論が提示されて次のパラダイムにシフトするという営みがなければ、ディシプリン(discipline: 学問)と呼べないのではないかと思う。

「学」という言葉が付けば、なんでもディシプリンになるかと言えば、そうではない。たとえば、「観光学」と言えば、観光学(形質人類学)もあり、日本では単に「人類学」と呼ぶ時、こちらの人類学を指すことが多い。果たしてそれはディシプリンなのか？ と問わねばならない。類似の名称に「観光社会学」や「観光人類学」といったものもあるが、これらは社会学や人類学といったディシプリンの中の 1 ジャンルと考えていい。それは「観光」を研究対象とする社会学や人類学であり、社会学や人類学の理論を用いて観光と呼ばれる現象を分析するわけだ。ところが、「観光学」となるとどうだろうか。隣接学問から導入し改変したものであれ、観光学独自に発達させた理論をもって研究対象にアプローチしているのだろうか。

日本語の「学問」という言葉は、極めてファジーに使われる。それは「研究(研究領域)」と同義で使われることがままある。また、「〇〇学」という時、それは〇〇を対象とする研究にすぎず、「〇〇研究」と呼ぶべきものであって、〇〇学というディシプリンではないことが多い。エリア・スタディーズがディシプリンでなく研究領域と見なされるのも、歴史学者も政治学者も社会学者も当該地域の研究(エリア・スタディーズ)を行うことができるからだ。同様のことが当てはまる「〇〇学」は少なくない。

以上のように考えていくと、天理教学は果たしてディシプリンとして成立しているのかという疑念が頭をもたげてくる。天理教学とは何か？ という大きな問題を考える時、その成立について、特に宗教学との関係において検証することが必要であり、近年、幾つかの重要な論考が発表されている。それらの論考を参照しつつ、異なるアングルから天理教学の有り様について考えてみてもよいかもしれない。